

荷風全集

第二十五卷

岩波書店

荷風全集第二十五卷

昭和四十八年二月五日 第二刷發行

定價八百五十圓

著者 永井 壯吉

發行者 岩波雄二郎

發行所

東京都下代田區下橋三丁目五番五號
株式會社 岩波書店

目次

斷腸亭尺牘	一
書簡集	五
補遺	五二
書簡索引	五九
後記	五七

斷腸亭尺牘

其一

明治卅三年十一月四日井上精一宛
麴町一番町四十二番地發端書

前略陳者今夕は御出被下い處不在にて失禮致い木挽町も漸く明日にて千秋樂に相成い九日よりは又
又次興行の稽古に取掛申い手筈に御座いへば兩三日間の休み中には是非御出で願上申い早々

四日夜

荷 風 拜

其二

明治卅四年正月十六日
井上精一宛同所發葉書

拜啓過日御頼申上置い今時の時評文やうの物明朝座の方へ行きがけに持參致し度くと存居いに付是
非とも今晚中に拙宅へお届置被下度願上い尤も小生歸宅は正九時打出し十時少々前には間違なく歸
宅致い(興行時間規則きびしきにつき歸宅時間も決して間違は無之い)

十六日朝十時投

荷 風

其三

明治三十四年七月二十日
井上精一宛相州逗子發封書

其後小生等の消息左の如し十八日の午後品川停車場にて首尾よく湖山巴山の二子と落合ひぬ車中さ
まざまの珍談に汽車の行く事早く間もなく大船の停車場に着きて一同下車したり。夕飯でも食はん
か止さうか杯とかくに要領を得ざりしは例の巴山子にて遂に停車場前の休茶屋の椅子に腰かくる事
に一決し其處にてなまぬるき蒹茶と氣味わるく塵にまみれたる駄菓子とに稍すきたりし腹の虫を慰
めつゝ巴山子にはやり／＼と前夜の大略を報告せられたり貴兄對花緑子の消息も充分知るを得たり
き仲見世を通行して君が例の物品贈與の一件には巴山子そゞろ感服の由物語らる。其より一同大船
の畠中を散歩せしかど由來名物一ツなき荒漠たる此地は何とて余等の目をひく様なるものゝあるべ
き。只一ツ端無くもある板橋を渡らんとしける時橋袂に縊死人假埋葬の揭示文の立てるがありき人
相書より衣服の有様なぞ委しくしるさる。もし女なりせば一層余等を驚したらん。商人體の男と
ありき。

日落ちて黄昏も早や過ぎんとする頃巴山子は六時十分東京發の汽車來りたれば其に乗りて出發せら
れたり余等は太船の畠中に凡そ一時間餘も十分心残りなく語りたる事なれば勇しく送別の帽を打振
りたり其れより余と湖山子とは尙停車場にある事三十分餘七時五十四分の列車に乗りて八時半過漸
く逗子につきたり夜は暗く新月は早や海に入りしと覺ゆ。九時頃漸く夕飯を了ると共に直に床につ
きて又多く語らず忽ち夢む。

十九日朝おそく起出で湖山子と共に海に泳ぐ岩角傳ひに葉山近くの磯邊に一日を送りたり。

二十日朝君が湖山子に寄せたる手紙に接す。今日も正に前日に劣らざる愉快を試みんとす海に泳ぐべきか川に棹さゝんか夜は又月よかるべし。湖山子の快活なる愛嬌ある行動には腕白なる弟等もいたく打喜べる様なり人見知りせず親しく共々に一ツ食卓に食事をなし午後の茶菓までをも共にせり此れ余の最も喜ぶ處木曜會はやがて廣く家族的團欒をも共にする事を得るに到るべし裏面に昨宵散步の圖あり一笑せられたし。

二十日朝

荷風 拜

啞々君

其四

明治三十七年一月十二日
井上精一宛米國タコマ發端書

去年は失禮な手紙差上げた故御立腹にはあらざるや小生二十五の厄年も早や昨日となり今度は後厄如何暮すものにや行先いつも眞暗なり大學館へ約束したる原稿當地より送るつもり之處氣分進まざれば當分見合し度く右の趣御主人へおついでのお話し被下度い春浪子御健在にいやは又よろしくおつたへ下され度い

一月十二日

荷風 拜

啞々君

其五

明治卅七年二月廿七日生田葵山宛
タコマ發封書

御手紙拜見した

此の週間は實に嬉しい事ばかり諸處方々から手紙が一時に七八通集つた。湖山（龜清亭の繪入）南岳及貴兄の三通が木曜會からの分である。貴兄には日本新聞に引つゞき執筆せらるゝ傍二六の客員となられたとの事余は滿腔の熱情を以て此れを祝します。ふところも大分暖に春めいて居らるゝ事と思ひます。

「祖先のかぶと」拜讀した。内容に於ては從來の所謂葵山式のもので此れと云つて變つた感想にも打たれなかつたが然し外形の整頓してゐる事には余は殆ど君の筆ではないかとばかり喫驚した。一字一句頗苦心の跡が現れ修辭上の缺點は一も見出し得ない。遠慮なく云ふと余は今迄貴兄があまりに修辭上に無頓着であつた事を遺憾に思つてゐた一人である。然るに此度の作物に於て此の大缺點の除かれた以上は最早や貴兄の前途は實に恐るべきものである。同人等君を稱して天才と云ふ。余も此れに同意する一人である。貴兄が特有の北歐的思想を發揮するに少くとも「祖先の兜」だけの好文字好文章を以て書き現はされたなら此の後貴兄の作品は正に完全の藝術といふを憚らず余はお

世辭ぬきで全く驚いたのだ。

翻つて余は當地へ來て以來氣ばかりあせつて少しも筆を進める事が出来ない。余は筆を取つて以來今日此頃程書けない事は一度もない。自分ながら不思議でならぬ位だが、思ふに此れは境遇が激變した爲めであらう。最初の中は非常に主觀的に傾いてゐるやうであつたが近頃は追々亦昔の様に冷靜に客觀する事が出来るやうになつた。然し何となく感興が起らなくて筆をとつても一枚やつと書く位で到底駄目だからもうしばらく何もせぬつもりである。此の地で見聞するところ大きい作物を書く可き材料は随分有る。出稼労働者だとか醜業婦だとか云ふものゝ生涯は何の技巧を施さずとも已に小説をなして居る。此の間労働者の葬式へ行つて見たが實に哀れなものであつたよ。鐵道に轢かれて無殘な死をとげたのだが誰も引取り手がないと云ふやうな始末。此地在留の日本人社會の有様は實に悲惨極るものばかり人間と云ふものは斯くまでに成功と云ふものゝ爲に自分からして悲惨な運命を招くものかと思ふと何となく厭世的になる。

作物が出来ないので一時は實に云はれぬ程煩悶したがいくら煩悶しても感興が湧かねば駄目だとあきらめて近頃は専心讀書に耽つていさゝか素養するつもりである。此間佛國小傑作集と云ふ六冊本でフローベル、ゴーチエー、メリメー、モーパッサン、バルザック、ドーデの短篇をあつめた新刊を讀んだが、まだ日本の文壇には譯されないでゐる好いものが澤山ある。去年の暮「ハイヤシンス

の心」と云ふ日本の女を主人公にした小説が出て評判がよい様だから讀んだ。此の作者は女で以前に「ジャパニースナイチンゲル」と云ふ矢張日本物を出して評判を取つた人。貴君も既に御承知であらう。處で此の「ハイヤシンスの心」を一讀するに人物の性格及事件の推移共に其程敬服して傑作とあがめるほどのものではない。舞臺を仙臺と松島に取つて主人公はハイヤシンスと云ふ英國人の孤女で其れがすっかり日本人的に成長して一篇の可憐な戀愛小説をなすのである。然し人種的愛憎の感念を寫した處及松島の叙景などは鳥渡見るべき點がある。全體にやさしく女らしい書方である。

其の他には所謂アメリカ種の新刊小説四五冊讀んだが何れも余の心には面白く感じなかつた。アメリカ種の小説はあまりに無邪氣樂天的で、到底佛國露國の作物に接するやうな譯には行かない。去年の末から今年の春にかけて紐育で一番賣れた小説と云ふのは「The Little Shepherd of Kingdom Come(キングダムカム少年羊飼)」の一篇で此れは批評家が純粹のアメリカンノーベルとなしたものである。文章は非常に好いやうだが趣向は例の如く子供らしい。山國の一少年が世間に出て幾多の苦辛をなめて大成功する立志小説である。成程此等が Pure American novel と云ふのであらう。アメリカ人種が深奥なる思想を忌み一意専心唯實世間の成功熱にかられてゐる面影は甚よく此の一篇によつて推察する事が出来る。萬事に余の如く文學的研究をなさんとするものにはアメリカは甚

不便不適當である。其れ故此れと云つてお傳へ申す事も甚だ少ない。且やタコマは米國中での一僻遠の地芝居もほんの田舎まはりの旅役者が来るばかりである。歐洲の其れには無論比すべくもあらずだが然し日本に居るよりかいくらか西劇の何たるかを知るには便利である。近頃は分獨逸のワグネル樂劇が米國に流行り出した。オペラに關する書物は目下紐育へ注文にやつた。其の中に届いたら一生懸命に此方を研究したいと思つて居る。脚本は水蔭子を初め春雨子までもう色々な人に先鞭を付けられてしまつたから余は一ツオペラ作者の畠を開いて見たい。然し此奴はなか／＼難儀だ。日本の舞臺へ應用しやうと云ふには少くとも西洋は無論の事、日本在來の音樂を一通は心得てゐなくてはならないから……思ふにぐ／＼してゐる中に誰かゞ又先鞭を付けてしまふだらうよ。

劇を見ると劇作者になつて見たい氣がすると貴兄は云はれたが全くさうだ。余はオペラを見ればオペラを作りたいしローマンスに接するとローマンスに筆を取りたくなる。さうかと云つてフローベルなどの自然主義に觸れると又其れも書いて見たい。思想混亂して遂には何が何やら分らなくなつてしまふ。何かと云ふと直ぐ裸體になつて踊り出す西洋婦人も實に云はれぬ味があるが翻つて意氣な藝者姿を目に浮べると是れ亦決して捨つべきものでない。東西の趣味思想共に混亂して目下は短篇の趣向すら満足に空想する事が出来ない。此れを思ふと小波先生などは實に達筆なものだと今更に驚かれる。旅の出先ではなか／＼思想をまとめて筆を執ると云ふ事は困難なものだ。

今度は非常に眞面目くさつた事ばかり書いたから艶麗な方の報道は此の次にゆづらう。然し出立する時君の忠告もあつたから先づ比較的品行方正の方だから安心したまへ。

貴兄は近頃ロストラブだつて云ふが又其の中に出来るからシヨゲ給ふな。面白くない世界と云はれるが世界は面白い爲めに出来て居るものではないと僕は思ふね。僕は決して死と云ふ事を恐れないが死の階段なる病氣はいやだ。君のいゝ人に送るおたのみの品承知した。何かさがして送るから安心したまへ。相變らず野心家だねえ。

二月二十五日

引越すかも知れないから手紙は此の次からタコマ古谷支店あて

S. Nagai c/o Futuya & Co. 1355 C Street Tacoma, Wash. U. S. A.

此から手紙で頻繁に藝術上の御意見を聞かしたまへ僕も大に論じるから。

其六

明治卅七年某月木曜會宛
米國華州タコマ發封書

○大變寒くなつて來ました二三日前には雨に交つて雪がチラ／＼降つて來る。霜は毎朝往來を眞白にしてゐます然し別にまだ風邪一ツ引かずにゐるのは何よりの仕合です。

○語學の稽古をするために目下猶ハイスクールに通つて居ます。最少し日本に居る時分にミツシリ

話せるやうにして置けばよかつた——後悔先に立たずとは此の事。

○此の頃は寒いから外出禁止其れ故日本の雜誌新聞などは手當り次第に讀むのです。歌舞伎座の十月興行ヒドク不評判の様ですね。讀賣で「福地某」を攻撃して居るのは痛快です。

○芝居と云へばお伽芝居非常な成功の由何よりも嬉しい。其れから流星君のバンニュー此度舞臺にかかるさうですね。流星君の得意實に思ふべし先生が氣焰萬丈の風采を想像すると目に見える様です。何にしても吾黨萬々歳小生は遙に流星君の成功を祝します。(流星君へ！ 貴著一冊頂戴いたしたし！)

○私も何か書きたいと常に頭を悩まして居るですが一向に思想がまとまらないです。然し見たり聞いたりする話は皆小説になつて居るですよ。殊に私の室を借りて居る家の主人などの生涯は全く冒險小説です。此の人昔は随分過激な勞働もしたさうだが又中々文學好で殊に鷗外先生の水泡集を日常愛讀して居るのには感伏しました。世には意外な處に意外な文學好が居るものです。

○然し一般に云へば實に無味乾燥な土地で面白い話をする様なものは一人もない。だから小生は最う已むを得ず大悟徹底と云ふ形で孤獨閑居自ら樂しむと云ふ方針に定めてしまつたです。

○西洋人の家庭へ這入らうと思つて此の地へ來るさう／＼種々の方面へ口をたのんであるですが今だに見當らない。といふのは此の地方では日本人の擯斥される事寧言語同斷。貸家貸間なども少し

奇麗な處は日本人と支那人はお斷りと云ふ位の事だから以て一般を想像するに足りるでせう。

○だから若し小波先生の伯林著聞集にならつて亞米利加西岸著聞集を書いたら、それはく暗黒なものが出来る。殊にこの土地で起る何かの紛々と云へば大概日本の密航婦の事が原因になつてゐるです。追々小生は觀察して醜惡劣等な在留日本人種の生活を描寫したいと思ふですよ。

○大に諸君と繪葉書或は手紙の往復を頻繁ならしめたいです。湖山子は大阪へ行き南岳子は男の子が出来たさうですね、目出度し。

○葵山子は相變らず藝術に對する大氣焰を吐いてゐられるでせうね。紫草君は來年ホントに米國へ來るですか。マダムが止めやせんですか。鬼川子の『東京』其の後景氣よろしきや何卒毎號送つてほしいものだ。

○柳陰老人健在なりや。帆船船で南洋行は危険ですよ。僕の家の主人公は北極及アラスカへ帆船の航海を實驗した事があるさうですが其の話を聞いたゞけでも實に危険だからね。まるで春浪君の小説其のまゝの冒險談だ。此等こそ日本に居たら聞く事の出来ない話だ。

○渚山君は依然として圓滿樂天の家庭に妻君と團圓仙集をやつて居られるでせうね。羨ましいものだ。冬向は隱退主義がいゝ。

○近頃讀んだものゝ中で抱一庵の泰西奇文、文藝でモーパッサンの「兄弟」鳥渡面白かつた。目下

アングルトムスキヤピンを讀んでゐる。米國に於ける奴隸の生活實に哀れなものだと涙を催す程だ。殊に毎日其邊を歩いて居る黒人の様子を見てゐると猶更興味が深い。

○紀行風の短篇お送り申した。實に拙劣我れながら驚く程だが折角出來たものだから破るのもつまらぬと思つてお目にかける。文藝か何かの雜誌にでも載せて貰へませうか知ら。私の身には一ツの記念的の作物であるから活字になる事が出來れば此の上ない幸福です。此の次には純小説を書くつもりで居ります。

其七

明治三十七年四月廿六日
生田葵山宛タコマ發封書

君の手紙が僕には一番感動を與へる。木曜會の中でも専門的に藝術の談話をするのは先君一人だからね。先生は餘り常識的だし春浪は僕の方とは少し派が違ふし湖山は例の如し君はどう思つてゐるか知らないが渚山君はなか／＼あなどり難き技倆を持つて居ると思ふ。一ト奮發すれば彼は必ず文壇の一部を騒がす事が出來ると思ふ。僕の性格が氣に入らないと云はれるが此ればかりは仕方がないよ。然し「旅び」と云ふものは色々な事を教へてくれるものだ、僕も今度の旅で今まで覺えた事の無い孤獨寂寞悲哀の感を經驗したし又異郷の風景の美しいのに出遇つては境遇が孤獨であるだけ其れだけ「自然の愛」を感じる事が出來た。人間は矢張一度は寂寞の中に身を置かなくては不可いね